23.4°

「あ、またずれてきた」
ジュニアが片目のまぶたを指で押さえてその場にうずくまったので、彼の後ろでスマホをいじっていたフェイスは、今まさに女の子へ送ろうとしていた『おっけー』と書かれているスタンプの隣にあった『また今度ね』のスタンプをぽんと押した。
履かれずに置かれている彼のスニーカーを手に取って、下駄箱からさっき彼が仕舞ったばかりの内履きを取り出し、チェンジする。
ジュニアは目の前に出された自分の内履きを見つめ、ことりと首をかしげた。
カナリアの尾羽がまっすぐ揺れる。
フェイスは出かけたため息を飲み込み、自分も昇降口にしゃがみ込んで彼の足に内履きを履かせると、お姫様にするよりもうやうやしく慎重に、彼の手を取って立たせた。
「ホテルに行こう」
「……いいけど」
いいかげん飽きねえ？　と苦笑するジュニアに、全然、とフェイスは返す。
そして彼が何もない壁に向かって迷いなく歩き出したのを、つま先を引っかけて止めた。

「っ、ぶね！　何すんだよクソＤＪ！」
「ごめんね足が長くて。ほんとごめん。自分でも足が長いなって反省してる」
「ふぁーっく！」
　もういい！　しゃべんな！　とそっぽ向いて校舎の廊下を歩き出した彼に「ごめんってば」と声をかけながら近づき、足跡ふたつ分、フェイスはジュニアより前を歩いた。
　先導しないと、ジュニアはこの校舎の中にある、この状態になった彼を閉じ込めておくために理事長が用意した部屋にまで辿り着けないからだ。
　その部屋にはジュニアの『ずれ』が自然に解消されるまでの数日間、不便なく生活することのできるあらゆるものが備えられている。ふかふかの清潔なベッド、大迫力でライブ映像を見られるスクリーン、食事が運搬されてくる小型昇降機、彼愛用のエレキギターとそっくり同じ見た目に複製されたギター、マーシャルのスタックアンプ……。
「こういうところも、たまにはいいもんだよな」
　ジュニアが『ホテル』と思い込んでいる改造教室に足を踏み入れると、彼の背後で三枚の金属扉が閉まり、電子錠が掛かる音が聴こえた。
「見てみろよ、公園もある。子供用かな」
「おチビちゃんが泊まるからっていう配慮でしょ。いいよ、お湯で遊んでて」
「おれは子供じゃねー！　街を守るヒーローだぞ！」

「はいはい。ちょっと待っててよ、家に連絡するから」
バスルームからばちゃばちゃと派手な水音がし始めた。今のうちにと、フェイスは母親に簡単なメールを送信した。また三日ほど学校に泊まる。心配しないで。と。
黒いアンプに腰掛けて、今回はどのくらいで終わるだろうかとぼんやり考えていたら、制服をびしょびしょに濡らしたまま、ジュニアが出て来た。
「ちょ、ちょっと。床に水たまり作ってるんだけど」
「……おまえ何に座ってんだ。やめろ」
おや、とフェイスの頭に一瞬よぎった淡い期待は、濡れた手で彼の体をアンプから引き剥がしたジュニアが次に発した言葉でぱちんとはじけた。
「かわいそうだろ」
あっち行ってろ、と続けられた言葉は、どうやらフェイスに向けられたものではないらしかった。ジュニアの目線は堅牢に閉められたドアの方へと向けられていて、やがてその場にスマホを持って立ちぼうけているフェイスへと向いた。
「動物いじめんのはサイテーだぞ」
「……ごめん」
「わかれば、いい」
ジュニアが絞っていない雑巾のような姿ですたすたとベッドルームへ行こうとしたので、

フェイスは慌てて引き止めた。いつもの場所にきっちり畳まれて収納されていたサイズが小さい方のパジャマを掴んで、その前にタオルが必要だったと今度は洗面所へ走って大判のタオルを取って戻ってくる。
　落ち着きがねーな、と呆れたような顔で見てくるジュニアを恨めしげに見下ろしながら、フェイスはジュニアの髪をわしわしと拭いてやる。
「この程度のホテルではしゃぐなって」
「おチビちゃんさぁ…。とりあえず体拭いて、この服に着替えて」
　何度も袖を通したはずのパジャマを差し出すと、ジュニアは頭に被ったバスタオルの隙間から、訝し気にそれを睨みつけた。
「それ、大丈夫かよ」
「大丈夫って何？　俺が作ったのに」
「おまえが作った……？」
「うん、新作。俺が作ったパジャマ。と、俺が作ったベッド」
「……ふーん。まあまあなんじゃね」
「褒め言葉としてはサイテーだね」
　ジュニアはストライプ柄のパジャマに身を包むと、ベッドの端に腰掛けて、分厚い窓の外を眺めた。いつもと変わらない、濁ったシルバースカイ。

雷神に愛された家系なのだ。
そう、ジュニアの父――この私立光学園の理事長レオナルド・ライトは話した。
一族から優秀な人間を次々と輩出し、天運に恵まれ事業も悉く成功する。しかし数年に一度、轟く渦のような形のアザを持って生まれてくる子供がおり、その子はとびきり雷神に愛されているために、神々の世界を垣間見てしまうことがある、と。
初めて「その」状態のジュニアに遭遇したとき、フェイスはどこからともなく現れた男たちによってこの部屋へジュニアと一緒に放り込まれ、説明もなしに数日間軟禁された。
事情を知らなかったのだから仕方ないのだが、そのときは異常事態に取り乱したフェイスを見ていたジュニアにその動揺が移ってしまい、「おれに任せろ」「おれが守ってやる」「おれはヒーローだから」と繰り返しながら部屋中いたるところで暴れ回り、そこにあるものを破壊し尽くした。
風呂は使えなくなり、ベッドは傾いてマットレスからスプリングが飛び出し、後で知ることになるのだが何でも好きな食事をデリバリーしてもらえる小型昇降機もぶっ壊れて、キッチンの戸棚の中から何とか救出した缶詰や乾パンでしのいだ。
そうして一週間経つか経たないかしたある朝、何かを警戒するようにずっと床に座り込んでいたジュニアがむくりと起き上がり、「……迷惑かけたな」と言った。

「たまにこうなる。『ずれ』るんだ、目で見ているものと、見えるものが」
ジュニアの口から聞いた後、フェイスは別室で彼の父親からも同じ説明を受けた。
同じ説明のはずなのに、彼本人から聞いた言葉は、フェイスの耳には愛というより呪いのような音に聴こえた。
学園内での行動を厳しく制限される【牛部】にジュニアが無理やり入部させられようとしていたのは、この学園内でかの一族の寵愛児（サンクトポルテクス）を囲い、監視する目的だったのだとフェイスは理解した。それなのに、ジュニアが軽音部…というか軽音同好会を立ち上げようなどとして、そのメンバーに偶然自分が加わったから、一族の秘密を知って利用しようとしていると疑われ、あそこに閉じ込めている間に処遇を検討されていたのだろう。

完全に巻き込み事故なんだよな、とフェイスは思う。
軽音同好会なんて、他の煩わしい部活に所属させられるくらいなら名前を貸すだけくらい良いかって、そのくらいの気持ちで返事したことだった。
ジュニアと以前から親交があったわけでもない。たまたま出会い、たまたま生活の場の一パーツだけ共有し、たまたま秘密を知ってしまっただけ。

それなのに、ジュニアはフェイスと一緒にいるときは、この状態になっても二、三日で、早ければ数時間で元の状態に戻った。

何もかもあべこべで不条理な言動をするくせに、フェイスがいつもと同じ調子で適当に応対していると、次第にお風呂はお風呂、ベッドはベッド、テレビはテレビ、ギターはギターに見えている行動をする。そしてある瞬間、わるい夢から醒めたかのように「なんでいつもおまえといんだよ」とうなだれるのだ。

「なんでいつも……俺なんだろうね」

だんだん対応に慣れてきた自分がいやだ。

俺が作ったものだと言えば警戒せずに袖を通すおチビちゃんがいやだ。

こんな役目を請け負うような、秘密を共有するような関係性じゃなかったのに。

でも、それなら明日からは他の人間が彼をこの部屋へ運んで一緒に過ごしますよとあの父親に言われたら、きっとあれこれ理由をつけて拒むのだ。きっと、自分はそうする。

「桜が綺麗だな」

窓の外を眺めていたジュニアが、ふわりと笑う。

埃っぽくて冷たい風が吹いている寂しい校庭しか、フェイスには見えない。

「今は…ええと……『ナツ』？」
「はあ？　桜の季節っつったら春だろ。夢でも見てんのかよ」
そんなとびっきりのブラックジョークを無自覚にフェイスに聞かせて、ジュニアは一瞬その柔らかな微笑みをフェイスに向けた。
「でもおれが一番好きな季節は夏だ。変なとこ気が合うな。……ま、クソＤＪはどうせ女と海で遊べるからだとか、そういう理由なんだろうけどさ」
そしてまた窓の外に広がる『ハル』を無言で眺め始めた。
フェイスも彼の視線を追いかけて、じっと目を凝らした。けれど、彼が見ているものと同じ景色はやっぱり見えない。
いまのジュニアに見えている世界には、『キセツ』というものが存在しているらしい。
地球は地軸を中心に常に自転を続けているが、その地軸が公転軌道に対して垂直ではなく、およそ 23.4 度斜めに傾いているのだそうだ。その傾きによって太陽の当たる時間が変化するため、北半球で夏は昼が長く、冬は逆に夜が長くなるのだと言う。そんなことも知らねーの？という顔でフェイスを見ながら教えてくれた。
この惑星の軸が傾いているなんて、本当に突拍子もないことを言う。ＳＦ小説ですら聞いたことがない。そんな与太話を公共の場で大っぴらにされてしまったら困るという彼の一族の考え方は、厄介事を避けて生きているフェイスには容易に理解できた。

もちろん現実では、昼と夜はまったく同じ 12 時間ずつあるし、北半球と南半球で気候の違いなんてほとんどない。めったに風も吹かないから、大気はいつも埃っぽくて、灰が混ざったような色をしている。

そんなにうっとりした目で見つめて、桜なんて、ちょっと咲いてすぐに散るこざっぱりした花のはずなのに。海なんて、あんな年がら年中寒い場所に女の子を連れて遊びに行くだって？　そんな光景、想像もできないが。

「……おチビちゃんが行きたいなら、海…行こうよ…一緒に」

「……は？」

ジュニアはフェイスの言葉に振り返り、またことりと首を傾けた。

〈了〉

23.4°

繪子(@ecosan_bsd)

2023.02.06